

# 『後拾遺集』恋歌考

——「恋一」巻を中心に——

実川 恵子

後拾遺集が、平安和歌史上の一つの転換期としてとらえられることは周知のことである。

それは、女流歌人の増大や、部立、歌人層、題詠歌の増加等、三代集に対する規範を脱しようとする新しい試みが随所に取り入れられていることによる。

なかでも、恋や雑部にその顕著な様相が認められる。近年になって、これらの巻における構成や特徴、撰者の編纂意図をめぐるとの検討の成果によって、恋部は、「恋一」から「恋三」、恋歌という分類中で独自性を有する「恋四」と、雑部にありながらも恋歌的要素を持つ「雑二」という三部の構成から成るとい見解（注）もなされる。このことは、後拾遺期になって社会の変動の中にあつて、恋歌が質的な変貌の諸相を見せるようになった一つの現象でもある。

そこで、改めて恋部、特にその基盤となる「恋一」の詠歌の特性や構成などをめぐって私見を述べてみたい。

—

まず「恋一」巻に配列される六十首の恋歌②を、詞書や詠歌内容から、構成や配列に対する撰者の意図について検討してみたい。

巻頭歌は、後朱雀院御製（604）の、

ほのかにも知らせてしがな春霞かすみの中におもふ心を

であり、恋部の巻頭を飾るにふさわしく、春霞を歌材として用い、その縁語「ほのかにも知らせてしがな」という初恋の詠歌を置く。

この御朱雀院歌は恋三の巻頭（715）にも載り、「陽明門院皇后宮と申しける時、久しく内に参らせ給はざりければ、五月五日内よりたてまつらせ給ける」と詞書として、

あやめぐさかけし袂のねを絶えてさらにこひぢにまじふころかな  
という歌を配している。この両歌は、『今鏡』「すべらぎの上・初春」に詠歌内容が対比して引かれている。恋部の巻頭や巻末に帝の詠歌を配する等、撰者の思い入れが込められている。

この巻頭歌から、実源法師詠（613）迄の十首が「初恋」の歌群として収められる。この十首中、三首目の馬内侍歌（606）の、

いかなれば知らぬにおふるうきぬなはくるしや心人知れずのみ

が、「題不知」とする他は、一組の贈答歌（源頼光、源頼家母。607、608）と、簡略な詞書中に「はじめて、つかはした」と記す六首、歌群の最終、実源法師詠は「初めの恋をよめる」と詞書され、題詠歌の如くでもある。

「題不知」歌として入集する馬内侍歌は、家集には「つつむことありてふみなどもかよはぬほど、かきあつめておくらせたる」とあ

り、当歌を馬内侍詠とすることに疑問を残す説もある。撰者はこうした詳細な詞書をあえて伏すことで何を意図したのだろうか。

この馬内侍詠は後拾遺集に十二首入集するが、いずれの歌も家集を資料としていえると思われる。しかし、撰者は歌本来に込められる文学性を評価し、縁語や掛詞を駆使した技巧的な本歌を恋一の前半部に置いたものと思われる。また、巻頭歌に続く叡覚法師詠(605)から四首(608)は、「山の下水」、「浮き蓐」、「磯辺の浪」、「沖つ波」と水に関連させた歌材が続く。

また、610の大江嘉言詠は前歌(平経章・609)詞書の「はじめたる女につかはしける」を承けるが、当歌の、

しのびつつやみなむよりは思ふことありけりとだに人に知らせん  
という「意を決して、思いを伝えた」という歌の内容にそぐわず、家集にある「経年の恋」の題詠歌とするのがふさわしく、なぜ、前歌に続けたかは不明である。

これに続く和泉式部歌(611)、

おほめく誰ともなくてよひよひに夢に見えけんわれぞその人  
は、詞書によると、男に代つて詠んだという代作歌である。伝統的な女歌の範疇から逸脱したような異質で強い主張が込められている。恋歌巻への和泉式部歌入集は十九首(恋一2、恋二2、恋三4、恋四11)、このうち題不知歌は十一首を占め、圧倒的に恋四(八首)に多く見える。

和泉歌に続くのは、「百人一首」にも選ばれた実方朝臣詠(612)の、

かくとだにえやはいぶきのさしも草さしも知らじな燃ゆる思ひを  
で、序詞・掛詞・縁語を使った技巧的な恋歌である。

この初恋の歌群の最後に置かれるのが、実源法師(613)の「初めの恋をよめる」と題詠歌のような詞書で収められた、

なき名立つ人だに世にはあるものを君恋ふる身と知られぬぞ憂き  
で、『金葉集』二度本(403)にも「恋の心を人人のよみけるによめる」と同じ題詠歌「命をしかけて契りし伸なれば絶たゆるはしぬる心ちこそすれ」を入集する。

以上、十首の「初恋」の歌を恋歌の冒頭から配列する。これらを概観するに、詞書表記や詠歌内容は必ずしも明確な統一制があつて配列されているとは考えられない。後拾遺集の資料となったものが現存する私家集と同様のものであつたか、また別のものが存在したかは特定できないが、この恋一の冒頭に配されたこれら十首の個々の歌を詠む限り、詞書の改変や撰者独自の読みが反映されているような部分も感じとられる。

続く614から620の七首は年月を経た男の恋心を伝える歌が並ぶ。このうち三首が題不知歌(617、618、620)で、他は「月明き夜ながめしける女に」(614)、「心かけたる人に」(615)、「はらから侍りける女のもとに、おととを思ひかけて、姉なる女のもとに」(616)、「八月ばかり、女のもとに、すすきの穂につけて」(619)とその状況や女についての説明が記される。

続いて、621(兼澄)、622(公成)歌は、「女を控へて侍りけるに、情なくて入りにければ、つとめてつかはしける」、「五節に出でてかいつくるひなどし侍りける女につかはしける」とあり、宮仕えする女への求愛歌である。兼澄歌は、三奏本『金葉集』第七恋に「女に物申してまたの日うつりがのしければつかはしける」と詞書し、女が拒否したことは伝えられていない。また、公成歌は五節の舞姫への思いを、見立てや掛詞、縁語を使った技巧的な歌に仕立てている。

これらに続く、七首(623~629)は女に文を送る男の歌が連なる。この一群は、「はじめて女のもとに春立つ日つかはしける」(623)という立春の詞書の能通詠から始まり、次歌(能因法師、624)は題不

知だが、四句に「けさ立つ春の」とあり、冷めた恋人を氷にたとえ、その氷も解けるようにいつかは心を打ち解けてくれるだろう、と期待する想いを述べる。

続く、三首(625-627)は、文を贈ったのに色よい返事をよこさない女に贈った次の歌が続く。625(輔親)、626(道命法師)は歌中に「満つ潮」、「潮たるる」の語が見え、いずれも技巧を凝らした恨みの歌である。

ふみつかはす女の返り事をせざりければよめる

祭主輔親

満つ潮のひるまだになき浦なれやかよふ千鳥のあともみえぬは

返り事せぬ女の、こと人にはやると聞て

道命法師

潮たるるわが身のかたはつれなくてこと浦にこそ煙たちけれ

返り事せぬ人に山寺にまかりてつかはしける

道命法師

思ひわび昨日山辺に入りしかどふみぬ道はゆかれざりけり

これらに続く628(前大納言公任)、629(藤原隆資)は、「七月七日」、

「七夕の後朝に」女に仕わした歌と詞書する。

雲るにてちぎりし中はたなばたをうらやむばかりなりにけるかな

逢ふことのいつとなきにはたなばたの別るるさへぞうらやまれける

共に七夕に寄せ、逢えない自分の恋の身上と比べ、年に一度の逢瀬を持つ牽牛織女の二星を羨んだ歌を置く。

この七夕題を詠んだ歌は、本集では巻四「秋上」(239-247)に九首撰入されるが、恋歌に七夕を詠じたものは、古今集や拾遺集には

見えず、恋歌としての新しい試みといえようか。

以上、「恋二」冒頭から二十六首は、凡そ初恋から始まり、恋心を伝え、求愛し、返事を寄さぬ女への恨みを述べ、逢うことが成就されぬ嘆きの歌と、恋の経過の諸相に従っていくつかの小歌群を形成しているように見える。このように前半部は比較的明確な配列意識が看取されるのに対して、以降は多種多様な恋歌が並列されているように思える。

## 二

次に「恋一」後半に入集する詠歌の特徴や配列意図を有するような数首を取り掲げながら、「恋一」構成の一端を検討して見たい。

その冒頭(630)、

ひとの氷をつつみて、みにしみてなどいひて侍りければ、

馬内侍

あふことのとどこほるまはいかばかり身にさへしみてなげくとかしる

を置く。男が言つて来た詞に逆襲して、相手の途絶えを恨んだ歌である。「滞る」に「凍る」を掛けた機知に富んだ詠歌である。続く

631は、藤原頭季「題不知」歌、

鳴のふす刈田にたてる稲茎のいなとは人のいはずもあらなん

である。三句迄が「いな(否)」を導く序詞として機能し、「鳴、稲茎」と八代集には詠まれることのない新らしい歌材を用いた六条藤家の祖としての歌風を形成している。当歌を「題不知」としたのは、「六条修理大夫集」詞書は「歌合に」とあり、この記述は歌合名を特定することができないことに拠るものであるうか。前歌と共に斬新な詠風が感じられる。

次の白河天皇詠(632)も、「殿上人達と探題和歌の際、逢坂の関

の恋を詠んだ」(詞書)ものと、歌合や歌会での詠歌を並べる。

633、634は次の贈答歌を置く。

題不知

道命法師

逢ふことはさもこそ人目かたからめ心ばかりはとけて見えなむ

返し

読人不知

思ふらんしるしだになき下紐に心ばかりの何かとくべき

人目を忍ぶ恋のもどかしさを詠う道命歌に対して、「下紐が解けないのは恋しく思われていない証拠」と切り返した女の歌が並ぶ。

続く二首(635、636)は、「雪」の歌材を詠む。

したきゆる雪間の草のめづらしくわが思ふ人に逢ひ見てしがな

入道一品官に侍ける陸奥がもにつかはしける

奥山の真木の葉しのぎ降る雪のいつとくべしと見えぬ君かな

635は、「題不知」、和泉式部歌で、正集の百首歌中、「冬二十首」

に初句を「下もゆる」として収める。これを、後拾遺撰者は「恋」

の部立に採ったということになる。清新な序詞とそれに導かれる下

句の主情が、撰者に恋歌としての新しさを評価されたのであろうか。

636は、源頼綱朝臣詠で、この歌も序詞を用い、雪が「溶く」と「心

が打ち解ける」意を掛け、つれない人への恋慕の情を込める。

これにつぐ三首(637、638、639)は、つれない女に対する男の歌で

ある。源政成の637歌は、童の名の「うれしき」に対して、我を思わ

ぬ「つらき」という名に仕立てて自嘲する次の歌を載せる。

うれしきを忘るる人もある物をつらきを恋ふるわれはなになり

次の638は、平兼盛の「題不知」歌、

恋ひそめし心のみぞうらみつる人のつらさをわれになしつ

この歌は、女の冷たい態度になお恋する気持から逃れられない想

いを自分自身に向け、相手の心をとれどそうとする。また、次の

藤原為時詠(639)は、他の男に心を移した女に贈った歌である。

いかにせんかけてもいまは頼まじと思ふにいとどぬるるたもとを  
あきらめを感じながらも相手への未練が募り、同情を引こうとす  
る恋の歌である。

以上の三首は、「われはなになり」637、「われになしつ」638、「い

かにせん」639の語は相手の態度から自分自身の心を客観的に見つめ

ようとしたり姿勢が感じとれ、恋歌の新しい一つの視点ともいえるの

ではなからうか。

この後は、相模(640)、能宣(641)と続く。両歌とも次のような

詳細な詞書が付されている。

公資に相具して侍りけるに、中納言定頼忍びて訪れけるを、隙

なきさまをや見けむ、絶え間がちにおとなひ侍りければよめる

相模

逢ふことのなきよかかねてつらければさてあらましにぬるる袖か

な

春より物言ひ侍りける女の、秋になりてつゆばかり物は言はむ

と言ひて侍りければ、八月許につかはしける

大中臣能宣朝臣

待てといひし秋もなかなになりぬるを頼めかおきし露はいかにぞ

相模歌では、訪れのない切なさをつらく思われるので、これから

先の恋の成行を思うと涙に濡れるというのである。当歌にあるよ

うな詳細な詞書は、定頼との歌(春上114、雑上955・956)にも付され

ており、定頼との関係がクローズアップされている。このような相

模の私的な状況を伝える詞書を、撰者があえて撰入する際に取り込

んだ理由は不詳だが、私的な事情を記すことで、一つの恋歌の挿話

として和歌世界の拡がりを持たせたものとも考えられるのではな

らうか。後拾遺集の相模歌には独特な主張が読み取れる。

次の能宣歌は、相模の「ぬるる袖」から「涙」、「露」と連想の糸が読みとれる。求愛する女に秋まで待つて、と言われたにもかかわらず、何も言つて来ないことを問う。詞書には、春から交渉していた時間的経過が記され、女に対する想いを秋の「露」によせて詠じている。女の言う「つゆばかり物は言はむ」が、読者の想像をかきたて興味深い。

この後の恋歌は、恋の様相が一層募り、想いが増つていく段階が語られている。

642、堀川右大臣詠は、頼通の歌合歌（宇治前太政大臣の家の州講の後の歌合）である。

逢ふまでとせめていのちのをしければ恋こそ人の祈りなりけれ  
切実な想いが込められた歌で、恋のためなら命さえも惜しくはない、恋こそ人の命を生かすもの、という下句が強く響いている。これに続き、相模の男に代つて詠んだ歌（643）、女に贈つた道信（644）の次の歌が並ぶ。

つきもせず恋になみだをわかすかなこやななくりの出湯なるらん  
近江にかありといふなるみくりくる人くるしめの筑摩江の沼

共に、「七栗の出湯」、「筑摩江の沼」の歌枕を詠み込んだ歌が配される。また両歌は恋歌の達人とも言うべき相模、道信詠で共に切ない思いを序詞や縁語、掛詞を使って軽妙で技巧的な詠歌となつてゐる。

一方、相模歌の詞書に関しては、家集にある「所狭げならむ」（周囲の状況に拘束されて、事が思いのままに運ばない状態）の恋の題を所望されて詠じた歌とされ、本集の詞書改変を疑う解釈もある。

これに続く二首（645、646）は、「題不知」歌だが、薄情な「つれなき人」のせいで、恋のつらさを知つたという自らの心を慰めた歌

とし、あえて詞書に詠歌事情を付さないことで、恋する苦しみと対峙する詠者の独白詠とも受け取れる。

これに続けて並ぶのは、次の歌（647、648）である。

女の、淵に身を投げよと言ひ侍ければ

源 道濟

身を捨てて深き淵にも入りぬべしその心の知らまほしさに

題不知

大中臣能宣朝臣

恋ひ恋ひて逢うとも夢に見つる夜はいとど寝覚めぞわびしかりける

道濟歌の詞書からは、どのような恋の状況を言うのか判明できないが、「女が淵に投身せよ」と言つたので、という独特な詞書とそういう女の言葉逆手に取り、切り返した歌は強い主調を表している。また、能宣歌は歌集に「こひ」とあり、歌合題として詠まれた歌とするが、初句「恋ひ恋ひて」は、募る想いの激しさを述べ、わずかな逢瀬を得た夢から覚めた後のむなしさを歌う。忍恋の極限状況をこの二首は描き出している。

この後は、能宣歌の長文の詞書を有する贈答歌（649、650）を載せる。

賀茂祭の婦さに前駮つかうまつれりけるに、青色の紐の落ちて  
侍りけるを、女の車より唐衣の紐を解きて綴ち付け侍りけるを、  
尋ねさせけれど、誰とも知らずやみ侍にけり、またの年の祭の  
垣下にて、齋院にまいり侍けるに、女の、いづら、付きし紐は  
とおとづれ侍りければ、つかはしける

大中臣能宣朝臣

唐衣むすびし紐はさしながらたもとははやく朽ちにし物を

返し

読人不知

朽ちにける袖のしるしは下紐のとくるになどか知らせざりけん

能宣歌詞書は、賀茂祭が終り、齋王が齋院にお帰りになる折に前駆としてお仕えた時、自分の着物の紐が落ちたのを、女の車から唐衣の紐を解いてそれを綴じつけてくれた。それが誰なのかわからないで、翌年女が言つて来たのに送つた歌と物語性を帯びている。そして、紐はそのままであるが、袂は恋しさのあまりに涙で朽ちてしまつた、と歌う。これに対して、女も朽ちてしまうほどの恋の想いならば、なぜ下紐が解けて恋を知らせることがなかつたのか、と挑発する。

このように物語的な要素を持つ長文の詞書が、恋の和歌空間を語り出している。これに連なつて、651(題不知、能因法師)、

錦木は立てながらこそ朽ちにけれけふの細布むねあはじとや

も、前歌と同様の「朽ちる」の語を持つ。この歌は、『能因法師集』「東国風俗五首」の一首で、能因が実際に地方遍歴した折の見聞を詠じたものかとも思えるが、錦木の習慣や、けふの細布の特産品などを歌中に詠み、契りを結べない悲しみを詠う。

「恋一」歌終盤の655から658歌迄の四首は、「恋死」を主題とする歌を並べる。

題不知

小弁

思ひ知る人もこそあれあぢきなくつれなき恋に身をやかへてむ

平 兼盛

人知れず逢ふを待つまに恋死なば何にかへたるいのちとかいはむ

長久二年弘徽殿女御の歌合し侍りけるによめる 永成法師

恋死なむいのちはこの数ならでつれなき人のはてぞゆかしき

俊綱朝臣の家に題を探りて歌よみ侍りけるに、恋をよめる

中原政義

つれなくてやみぬる人はいまはただ恋死ぬとだに聞かせてしがな  
逢えない悲しみ、つらさに耐え切れず、ついに自分の命とひき換

えにして恋死する、また自分の命はもの数ではなく、恋しいあの人の最後が知りたい、あるいはつれない人に、もうなす術もなくただ恋死すると聞かせたい、という絶唱歌が続いている。

この後は、歌会や歌合での歌が撰入される。658歌(中原政義)詞書の「俊綱朝臣の家に」とあるのに続き、659(良暹法師)、660(国房)の二首は、詞書に「文に書かむによかるべき歌とて、俊綱朝臣人人によませ侍りけるによめる」とした、

朝寝髪みだれて恋ぞしどろなる逢ふよしもがな元結にせん

からころも袖師の浦のうつせ貝むなしき恋に年のへぬらんである。これらの歌は、伏見の山荘俊綱邸で催された歌会に懸想文に書くのによさそうな歌として詠まれたもので、良暹法師詠は「朝寝髪」、「しどろ」、「元結」と奇抜な着想をもとに、大胆な求愛歌を詠じている。また、次歌も新しい枕詞「袖師の浦」を用い、序詞仕立ての技巧的に新しい詠み口の恋歌を創り上げていると思われる。いづれも、『古来風体抄』に言うような「撰者の好む筋や、ひとへにをかしき風体なりけん」という評価と合致するような新奇な趣向をねらつたような恋歌である。

次の661(師実)、662(顕房)は共に、承保二年九月十三日関白左大臣師実家歌会に出詠し、「経年恋」という題で詠んだ時の歌で、師実詠は、自分を鳥屋に帰る鷹同然とし、年が経つても「木居」ならぬ「恋」は忘れないもの、と上句の謎解きのような発想を用いる。わがが身はとがへる鷹となりにけり年をふれども恋はわすれず年をへて葉がへぬ山の椎柴やつれなき人のこころなるらん

顕房詠も、幾年経つても落葉しない、山の椎柴のように私に対しても変わることはないつれないあの人の心であらうか、と椎柴を心変わりすることのない相手の心に喩えている。この二首は、「恋一」巻の年を経る恋を主題として最後に再び統括して載せている。

「恋一」巻をしめくくるのは次の歌である。

日ごろけふと頼めたりける人の、さもあるまじげに見え侍ければよめる

道命法師

うれしとも思ふべかりしけふしもぞいとど歎きのそふこちする  
前前から、今日は逢おうと約束していたのに、それを果たしそ  
うにないという、女に対して期待を裏切られた悲しみの心を詠う。

このように、「恋一」巻の最終部は、「経年恋」の題詠歌に続けて、  
相手の裏切りに悲しむ歌をもって終了している。

### 三

以上、六十首に及ぶ「恋一」所収歌について、その構成を中心に  
概観してみた。凡そは勅撰集の伝統に則り、恋愛の段階的経過に従  
って配列されている。つまり、「恋一」は初恋、求愛、忍恋、経年  
恋といった逢瀬前の初期の段階がいくつかの小歌群を形成しながら  
構成されている。

六十首の「恋一」歌前半に関しては、初恋（十首）、恋心を伝え  
る（七首）、宮仕えする女への求愛の歌（二首）、女に文を送る男の  
歌（七首）と、同じ題意を持つ小歌群を比較的恋の進行に伴って配  
列する。この前半部に対して、後半部は、多様な恋歌が並列する。  
また、「題不知」歌が前半には四首（606・617・618・624）であるのに  
対して、後半では十一首（631・633・635・638・645・646・648・651・652・  
655・656）、四三パーセントを占めるのも一つの特徴といえよう。こ  
れらの「恋一」の「題不知」歌は、私的な歌合、歌会詠や屏風歌で  
ある場合が多く、公私を区別する後拾遺集の撰集意識の一つの表れ  
であるとも考えられる。

多様な「恋一」歌を配する後半部の歌は、序詞や縁語、掛詞を用

いた技巧的な歌や、新しい歌語や歌枕を用いた斬新な発想の恋歌や、  
東国風俗歌が見られる。

また、比較的簡略化された詞書の多い「恋一」にあつて、長文の  
詠歌事情を記す女への恨みの歌や、物語性を帯びた長文の詞書の贈  
答歌を配するなど、題詠的な恋歌だけでなく、日常的な男女の恋歌  
の逸話を載せ、恋歌としての拡がりを持たせてもいる。

特に後半最終部は、忍恋のつらさや悲しみにたえきれず、「恋死」  
するという極限の状況が詠われ、最終歌のような裏切られた悲しみ  
をもって「恋一」を終わるのは、先行勅撰集には例がない。

いずれにしても、後拾遺集「恋一」は、四巻に縮小した恋部の始  
発部として、撰者は恋歌のパターンを様々な視点から捉え、伝統的  
な恋歌とは異なる歌風を形成したものと思われる。

この他、入集歌人の側面や三代集恋歌との比較についても検討を  
試みるつもりであったが、次回に譲ることにしたい。

### 注

- (1) 武田早苗氏「後拾遺集の四季歌・恋部の構成について」（『横浜国  
大語研究』2、昭59・3）
- (2) 文中に引用した本文は、「新編国家大観」に拠るが、表記につい  
ては改めた所もある。
- (3) 犬養廉氏他「後拾遺和歌集新釈」下巻606歌「詠歌事情」項
- (4) 藤本一恵氏「後拾遺和歌集全釈」下巻643歌「参考」項
- (5) 武内はる恵氏「後拾遺和歌集」の「題不知」をめぐって」（『和  
歌文学研究』第五十五号・昭62・11）
- (6) 古今集、恋一・巻末歌・題不知、読人不知、51奥山の昔の根しの  
ぎふる雪のけぬとかいはむ恋のしげきに

後撰集、「男につかはしける」、読人不知、600

ながらへてあらぬまでも事の葉の深きはいかにあはれなりけり  
拾遺集、題不知、読人不知・697

君をのみ思かけこの玉くしげ明けたつことに恋ひぬ日はなし